

令和五年春彼岸法話
迷いについて

正信寺 石川英和

令和五年十一月二十三日 正信寺 報恩講 法話

迷いについて

石川英和

【はじめに】

本日もご多忙のところ、報恩講にお参りいただきましてありがとうございます。ございます。

今日は迷いについてお話しさせていただこうと思います。

【迷いの中に生きている】

昔は、よく道に迷いました。最近ではグーグルマップなどの地図アプリをスマホで見ることによって、目的地に到達するには、どの角を曲がって、どのくらい進めば到達するかわかるようになりました。便利なものです。

最近では、鎌倉の路地にある地元の人しか来ないようなお店にも、外国人がスマホ片手に訪れます。そういった意味で、最近道に迷うことは減ったかなと感じます。

ところが、私たちは日常、様々な迷いの中で生きています。

晩御飯は何にしようか？今日は何のテレビ番組を観ようか？

些細なことで普段から迷っているのではないのでしょうか。

皆さん、今年の夏はとても暑くて、大変でしたね。暑い盛りには、体温の三十六度を超えるような日照りがありました。冷房している部屋に長くいるのは体に良くないなどと言いますが、室内で冷房をかけずに高く

なった電気代を節約したり、年を取って暑いと感じる感覚が鈍くなってしまったりして冷房をかけなかった方が、室内にいて熱中症で亡くなっているという報道が何度もありました。テレビの天気予報でも、冷房を適切にかけて過ごすようにという注意を繰り返して放送していました。

このくらいで冷房を入れたら電気代もつたいないか、熱中症にならないために冷房を入れるか、ハムレットの「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」ではないですが、暑いだけでも迷いは生じます。

そんな中、蚊やセミなど夏の昆虫も暑すぎて活動が鈍るくらいだったと聞きます。

今年の夏は蚊に刺されることも少なかったと記憶します。何でも、蚊は三十度を超すと発生するものの、刺す気力がなくなるといふか、刺す能力が落ちるそうです。

しかしながら、蚊やセミは、地上では夏にしか生きられないのです。セミの寿命は一週間と聞きます。春や秋の心地よさとか、冬の寒さは知らないのです。今年の夏は特別暑いとか、早く秋になって涼しくなれば良いかと思わないのです。そういった意味で、蚊やセミは暑くても迷いが無いのです。

先日、ニッポン放送の番組のポッドキャストを聞いていたところ、増毛会社のコマーシャルが流れていました。聞き流したので正確には文言を覚えておりませんが、概ねこういった内容でした。

髪型に迷うことも、整髪料に迷うこともあるが、毛の薄い人が、増毛するとそういった迷いも楽しいものを感じる。

髪型を気にしたり、寝癖を気にしたりということも、髪がある人の悩

みや迷いであって、髪の毛がなければそういった迷いもないということ
です。

今、腹ペコでいろいろと食べるものがなくても、目の前にパンが一つ
あれば、迷わずありがたくそれを食べるだろうと思います。御飯やラー
メンなど選択肢があるがゆえに、迷うということは、実は贅沢なことな
のだと思います。もし、迷うことがあれば、迷えることに感謝しても良
いかもありません。

【迷うとは】

「迷う」を、小学館の新撰国語辞典で引いてみますと、次のように出
てきます。

- ① 道や方向が分からなくなつてまごつく
- ② 判断・決断がつかず心が揺れ動く
- ③ 理性を失い、間違つた方向に進む
- ④ 死者の霊が成仏できないでいる

新撰国語辞典で示している①は、スマホの地図アプリで大分解消され
ました。先ほどの食べ物で迷ったり、髪型で迷ったりするのは②の例
だと思えます。新興宗教に高額献金をしてしまう人や、ギャンブルに
お金をつぎ込んでしまう人は、③なのでしょう。④の迷いは最後に話
すとして、①の迷いのお話をします。実際の道順ではなく、生きて
いく道の話です。

【迷惑】

子供のころから「他人に迷惑をかけないようにしましょう」と言われ

て育つたのではないかと思ひます。

これは、社会生活のルールを破つたり、突飛な行動をしたりして、他
人に不快な思いをさせることや、不都合なことを起こすことです。銀行
のシステムトラブルで、頭取が「多大なご不便とご迷惑をおかけしまし
た。」と謝罪します。

「迷」はこの場合先ほどの①の事例で、本当に道に迷うことを意味し
ます。「惑」は途方に暮れて迷うことを意味します。どちらの文字も、本
来は迷い惑うことを意味します。

中国の曇鸞大師は、世親菩薩の『浄土論』の注釈書の『浄土論註』の中
で次のように述べています。曇鸞大師も世親菩薩も七高僧のおひとりで
す。

「ぶつもと 仏本このしよつごんしやうじやうくどく 莊嚴清浄功德を起したまへる所以は、ゆえん 三界を見そなはず
に、これこぎ 虚偽の相、これりんてん 輪転の相、これむぐう 無窮の相にして、しやつかく 虱蠖「かが 屈まり
伸ぶる虫なり」の循環するがごとく、さんけん 蚕繭「さんえ 蚕衣なり」の自縛するがごと
し。あはれなるかな衆生、この三界にしば 締「むく 結びて解けず」られて、てんじやう 顛倒・
不浄なり。衆生をふこぎ 不虚偽の処、ふりんてん 不輪転の処、ふむぐう 不無窮の処に置きて、ひびきやう 畢竟
あんらく 安楽のだいしやうじやうしよ 大清浄処を得しめんと欲しめず。」

三界は、一切の衆生がしやうじやう 生死流転する迷いの世界です。即ち、いんよく 淫欲・食
欲の二欲の強いものが住む所である欲界と二欲は離れたが、まだ物質的
存在にとらわれているものの住む所である色界と・物質を超えた世界で

ある無色界の三つの世界のことです。

蜘蛛しちまぐとは尺取虫のことです。尺取虫が同じところを何度もめぐりますがにより、自らの力ではいつまで経っても迷いの世界から抜け出ることのできない私たちの姿があらわされています。

蚕繭さんけんとはかいこのまゆのことです。かいこが自らのまゆで自らの体をしぼるすがたにより、自らの煩惱によつて、自ら迷いの苦しみを生み出している私たちのすがたがあらわされています。

顛倒てんどうとは逆さまという意味です。真実とはまるで反対の私たちのあり方を表わしています。一方、真実に即した不倒の智慧を具えておられるのが阿弥陀如来です。

尺取虫は、植木鉢の周りをぐるぐるとまわり続けます。決してふざけているわけではなく、身体全体をくねらせて一所懸命です。めでたく蝶になればよいのですが、ついには力つき命終わっていくこともあれば、鳥に食べられてしまうこともあるわけです。いかにも人間の真相に目覚めた喩えだと思えます。

この喩えを自分自身に当てはめてみます。

私は、住職をしながら、サラリーマンの二刀流をしております。大谷翔平のように、ピッチャーもバッターも、人並み以上にできればよいのですが、なかなかそういう訳にはいきません。

住職もサラリーマンも、その場その場では、一生懸命にやっているつもりですが、人生を貫く真理は何なのか、きちんと理解して生きていかないと、尺取虫が這っているように空しくいつまでも同じことを繰り返

しているようにも思えます。

【親鸞聖人の迷い】

親鸞聖人の生涯を思うと、沢山の迷いがあつたのではないかと思えます。

まず、京都の青蓮院で天台座主の慈円大師のもと得度して、比叡山延暦寺で二十年間修業をしました。しかしながら、覚りを得ることができず、聖徳太子ゆかりの寺、頂法寺六角堂で百日参籠をします。この時の迷いは、九十五日目の朝の夢告の中に語られていると思います。

頂法寺の御本尊の観音様が夢の中に現れ、次のようにお告げになります。

(原文)

「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極楽」

(意訳)

「修行者が因縁により、女性と交わらざるを得ないときは、私が女性となろう。そして、一生の間その者に連れ添って臨終の際には、極楽へと導こう」

この言葉は、煩惱を持った人間をありのままに救ってくださる教えと、親鸞聖人は覚ります。そして、法然上人が東山の吉水に開いた草庵に赴き「専修念仏」の教えに帰依しました。

これを裏返すと、親鸞聖人は、比叡山で長年修業をしても、女性への思いと、死の恐怖の迷いを断つことができなかつたということなのではないかと思えます。

次に、承元の法難に遭います。

承元の法難は、後鳥羽上皇の留守中に、上皇に仕える女官が法然上人の弟子、住蓮、安樂が主催する法会に参加し、そのまま出家するという事件のことです。

それまでも、比叡山や奈良の興福寺からの、法然上人の専修念仏は南都北嶺諸宗から念仏に偏執した教えと見なされており、その教えが広まるとともに、専修念仏者の中に他宗との軋轢を生む者が出ていたことも背景にあり、法然上人は『七箇条起請文』を作成して比叡山からの批判に対処しましたが、興福寺が後鳥羽院に『興福寺奏状』を提出し専修念仏停止を訴えておりました。

後鳥羽院の私憤と興福寺の思惑とが一致して、専修念仏の弾圧が行われました。建永二年(1307)に専修念仏は禁止され、法然上人は土佐(現在の高知県)、親鸞聖人は越後国(現在の新潟県)に流罪となりました。

親鸞聖人はこの法難を批判して『教行信証』後序に、
「主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨みを結ぶ」

と記しています。上皇(天皇)をはじめ、その臣下のひとたちは、真実の法に背き、世の中の正義に違い、理由のない怒りや怨みをもってことを行っているという意味です。

親鸞聖人は僧籍を剥奪され、藤井善信よしざねという俗人として越後に流されました。その時、念仏することが禁止されたわけですから、どのように信仰を続けていくかの迷いは大きかったと思います。言葉は悪いですが、上皇の女官のおかげで、ひどい迷惑をかけられたということではないでしょうか。

その結果、親鸞聖人は、僧でもなければ俗人でもない「非僧非俗の身」

として生きていく覚悟ができました。迷いを振り切ったということだと思います。

最後に、善鸞事件についてお話ししたいと思います。

親鸞聖人は、越後への流罪が赦免された後、敬愛していた師の法然上人が亡くなったことを知り、京都へ帰らず、常陸の国に稲田の草庵を結び、関東で布教をします。時代は鎌倉時代で、念仏が禁じられている京都より、鎌倉幕府にも近く、霞ヶ浦を通じて利根川方面の水運が盛んな場所が、広い地域に布教するのに適していると思われたのではないかと思います。稲田の草庵で二十年布教をするとともに、『顕浄土真実教行証文類』(教行信証)の執筆を進めて六十歳になりました。『教行信証』の草稿本が元仁元年(1224)に完成しました。この年が浄土真宗の立教開宗の年とされています。

その後、親鸞聖人は京都に上洛しました。関東では、『教行信証』を推敲するにあたり、資料が不足していたのではないかと説があります。

親鸞聖人が京都に去ったあと、関東では、専修念仏の教えが曲解されて、門徒の間で混乱が生じてしまいました。

そこで、親鸞聖人は息子の善鸞を関東に送り、教えを正そうと思いましたが。善鸞は、親鸞聖人の息子である自分だけが正しい教えを受け継いだとして布教しましたが、門弟筆頭の性信しょうしんや真仏しんぶつを訴えるなど、更なる混乱を招きました。関東の混乱を治めるために、善鸞に義絶状をしたため、息子と縁を切る事態に至りました。

関東の混乱と、身内の義絶に、心迷い、悩み苦しまれたのではないかと思います。

三つの事例を挙げましたが、親鸞聖人も数多く迷い、悩まれたのでは

ないかと思えます。親鸞聖人のすごいところは、そういった迷いを一つ一つ乗り越え、解決していったことだと思います。

【成仏できない】

最後に、新撰国語辞典にあった、④の事例、「死者の霊が成仏できないでいる。」ということについてお話しします。

死者の霊が成仏するという言葉は、浄土真宗の場合、死者が極楽浄土に往生すると言い換えていいと思います。一心に念仏すれば、往生できるといいます。

真実の信心は「一心」であるとも言われます。また、往生浄土のための正しい因となる行為である正定業の念仏を一心に専念することも、信心を的確に表しています。一心は、弥陀の本願を疑わず、二心ないことを意味します。

弥陀の本願は、『仏説無量寿経』に書かれている、阿弥陀仏が法蔵菩薩として修行されているときに立てられた四十八の誓願です。その十八番目に、「私の名前を称えた人をすべて救わなければ、私は仏になりません。」とあります。それを疑いなく信じること。それが一心です。阿弥陀仏の名前を称えること、念仏こそが正しい行、すなわち正定業とされています。

つまり、辞書に記載ある「死者の霊が成仏できない」というのは、浄土真宗で言えば一心ではなく、二心あり、弥陀の本願を疑う、迷いの状態にあるということなのですが、阿弥陀如来は、自力であっても念仏する人も救うといわれ、五逆や誹謗正法の人以外は救うとされています。つ

まり、ほとんどの人を救うといわれていますので、浄土真宗では「死者の霊が成仏できない」ということはないのかもしれませんが。

煩惱具足で往生できると教えられ、煩惱が消せない不完全な自分は、弥陀の本願である「至心信樂の願」、すなわち第十八願の念仏往生の願を信じるしかないところまでは、理解できます。ところが、「弥陀の本願を一心に信じましょう」といわれても、なかなか難しいと感じています。それは、煩惱があるからなのだと思います。

自力の修行などの雑行を捨て、念仏を称える正行をする。言葉では簡単ですが、日常生活で、自力を捨てるのは難しいです。また、いろいろなことをしなければならなくて、正行だけをすることも、なかなか叶いません。このままで良いのかと感じることはありませんか。心穏やかな、覚りの境地に達することが確実になる正定聚不退転の位に辿り着くのは遠いと感じませんか。

仏説阿弥陀経の最後に、「五濁惡世 行此難事 得阿耨多羅三藐三菩提 爲一切世間 説此難信之法 是爲甚難」とあります。

その意味は、「この五濁（時代の穢れ、思想の穢れ、欲望の穢れ、人間そのものの穢れ、寿命の穢れ）の穢れた世界で、この困難を成し遂げ、最高の覚りをついに得てこの信じがたい教えを、人々に説いていることは、困難なことだった」ということです。

お釈迦様が弟子の舍利弗に述べたことですので、お釈迦様も、穢れた娑婆世界で、信じがたい最高の覚りを得る教えを説いていることは甚だ難しいと感じているわけで、娑婆の人が簡単に迷いを消すことはできないのだろうと考えていたと思います。

だからこそ、弥陀の本願が建てられたと思います。そして、私たちは

弥陀の本願が成就したことを信じ、念仏をして極楽浄土に往生することを願うのです。

【おわりに】

だれもが、心穏やかに迷いのない生活をしたいと思っ
ていると思います。ところが、健康のこと、家族のこと、自分の葬儀やお墓のこと、
将来のお金のことなどなど、心配からたくさん迷いが生じます。それ
らは、煩惱から生じるといいます。

正行である、念仏をすることによって、さらに、一心に弥陀の本願を
信じることによって、これらの迷いが雲散霧消するかというと、なか
なかな簡単ではありません。

お釈迦様も、覚りを得ることは簡単でないということを言われてい
ます。しかしながら、あまり深いことを考えず、他人と自分を比較せず、
あるがままの現状を受け入れて、迷ったときは念仏を続けていくこと
が、正定聚不退転の位に少しでも近づいて、心の安寧につながるのでは
ないかと思えます。

本日は、ご清聴いただきありがとうございました。

